

幼児期における配分課題の発達的变化
- 意味づけがある場合，ない場合 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
横田 聖子

本研究では，1歳後半から4歳前半にかけての配分行動の変化過程，すなわち「入れ分け」が，「配分」，そして「配分」が不均等から均等へ変化する過程，またその過程の中で，「分配」がどのように展開していくのかについて「器への入れわけ」課題を用いて検討することを目的とした。

観察は，入れ分けをする皿の帰属を付与しない，「単純配分」条件，参加児と実験者に帰属するよう命名付与した「2者場面分配」条件，実験観察場面にいない第三者（家族）について命名して，帰属先を付与した「3者場面分配」条件の3条件を設定した。条件1「単純配分」は，参加児69人中69人全員に対し実施，条件2「2者場面分配」は，参加児69人中，皿2枚の帰属の再認ができた54人に対し実施，条件3「3者場面分配」は，条件2「2者場面分配」において，皿2枚の帰属の再認ができた54人中，皿3枚の帰属の再認ができた51人に対し実施した。

分析の結果，2歳前半に配分が可能になると同時に一時的に均等配分が出現し，その後2歳後半では配分先を自己に不均等化させる傾向が顕著になるが，3歳以降再び均等化傾向がつよくなり，4歳前半ではそれがより安定していくという複雑な経過をたどることが示唆された。